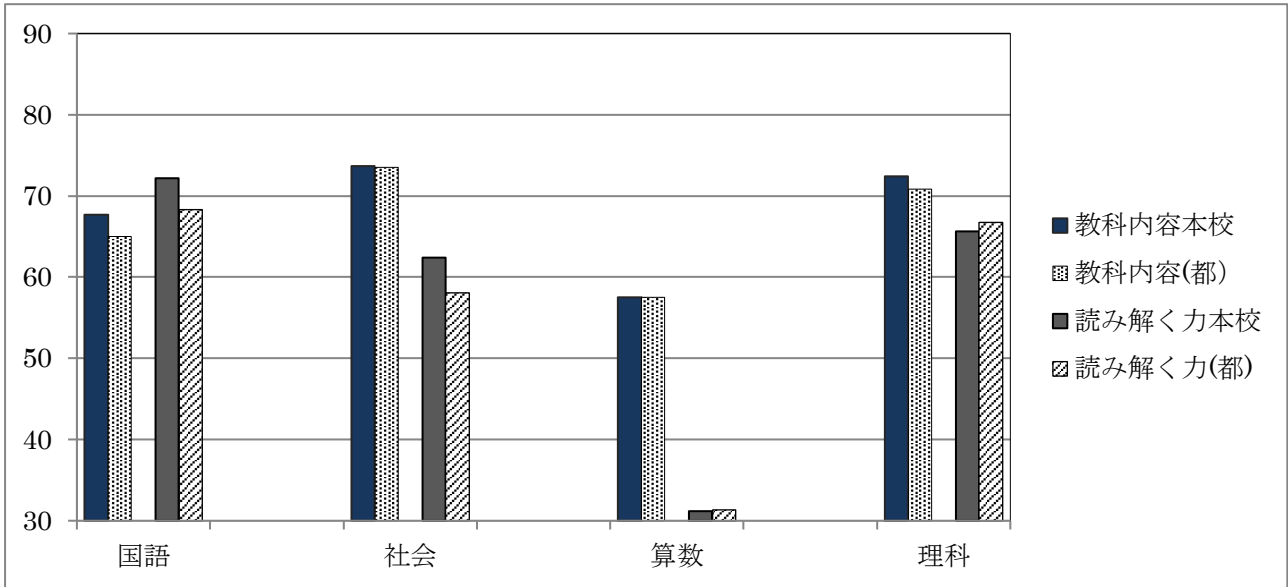


平成 30 年度 「児童・生徒の学力向上を図るための調査」 結果考察



## 5年 国語

### (1)教科について

教科全体の正答率は、都の 65.5%に対して学年 68.4%と、2.9 ポイント上回っている。

国語科の 5 観点のうち、4 観点は都の平均を上回っており、「関心・意欲・態度」に関しては、全体で 95.6%とポイントが高い。「聞く・話す」は 0.1 ポイント、「言語」は 5.8 ポイント、「書くこと」は 1.5 ポイント上回っている。

一方で、都の平均を下回った「読む」能力 (0.7 ポイント下回っている) については、児童が活字に触れる機会が少なく、長い文章を読むことに抵抗があることが推察される。まずは読書や魅力的な読み物教材などで児童が「読む」ことを楽しむことが大切である。そのような経験が重なれば、長文問題にも抵抗感なく取り組めるようになると考える。また語彙も増え、読解力も向上することが期待され、「書くこと」などの能力の向上につながると考える。

これらを踏まえて、以下の授業改善策を考える。

#### 〈授業改善のポイント〉

まずは文章に親しませることが大切である。朝読書や図書の時間に、本の紹介やブックトークを行い、すすんで本を手にとれるようにする。読書に抵抗のある児童には、図鑑や化学、スポーツ、工作の本など、興味のある分野の本から薦め、面白さを味わえるようにする。また、国語の読み取りの授業で登場人物の思いや筆者の意図などを話し合う際、自分の意見の根拠となる文章を挙げるよう指導するなど、文章をもとに内容を正確に読み取る力を伸ばしていく。

## (2)読み解く力について

東京都は、読み解く力を、「必要な情報を正確に取り出す力」「比較・関連付けて読み取る力」「理解・解釈・推論して解決する力」の3点として定義している。読み解く力の正答率は、72.2%と、都に比べて3.9ポイント上回る結果となった。

観点別に比較すると、特に「取り出す力」が3.5ポイント、「読み取る力」が、5ポイント、「解決する力」は3.2ポイントと全ての観点で都の平均を上回る結果となっている。

全ての観点で平均を上回っているが、課題点をあげると、次のようになる。

### 〈授業改善のポイント〉

まず、何を問われているのか理解しなければ、必要な情報を取り出せないなので、語彙を増やす活動に取り組むこと。何より、毎時間の課題を明確に児童に示し、自分がどのような力がついたのか分かるようにしていく。

また、課題解決のための資料を複数提示したり、自他の意見を比較しながら話し合いをしたりする活動に取り組む。その中で、情報を比較することのよさに触れながら、文章から読み取れる情報の根拠を他の資料（グラフ等）から探し、説明できるようにする。初めは資料を一つずつ提示し、読み取った情報を次の資料で裏付ける活動も想定できる。

## 5年 算数

### (1) 教科について

本校の正答率は、都の57.5%と同率であった。しかし、教科の内容で見ると都の平均を上回っているのは、「知識・理解」のみである。他の3つの観点においては、0.3~1.5ポイント下回っている。

観点別にみると、「技能」では、都の平均より0.3ポイント下回っている程度であるが、「関心・意欲・態度」では1.5ポイント、思考・判断・表現では、1.4ポイント下回っていることから、特に「思考・判断・表現」の向上を図っていくことが必要である。

### 〈授業改善のポイント〉

例年指摘されている問題解決能力の育成も重要であるが、まず「思考・判断・表現」の観点について育成していくために、自力解決の場面で自分の考えを絵や図、言葉を使って考えたり言葉で書いて表現したりする活動を繰り返し行っていく必要がある。

また、技能面として計算力（計算の仕方のポイントをおさえる）の向上、用語・定義や定理を再度押さえることが大切であり、授業のみではなく、朝学習や補習の時間、隙間の時間を有効に活用していくことが必要である。

## (2) 読み解く力について

本校の正答率は、都の平均を 0.1 ポイント下回る 31.3%であった。しかしながら、東京都においても正答率が 3 割程度であり、他教科と比べて著しく低いことから、算数科における読み解く力の向上に力を入れていく必要がある。

観点別にみると、「取り出す力」では、都の平均より 4.3 ポイントも上回っていたが、「読み取る力」では、1.8 ポイント、「解決する力」では、2.9 ポイント下回っていた。また、正答率の観点からみると、「解決する力」について都の正答率が 20.6%、本校の正答率が 17.7%であることから特に問題解決能力の育成が必要であることを示している。

### 〈授業改善のポイント〉

問題を読み解く力をつけるために、問題場面を自分の力で図や絵にかくなどして答えを予想したり、見積もったりしてから問題解決にあたらせる学習を繰り返し行っていく。思考の段階でつまずきが見られる場合には、見通しをもたせるために既習を振り返ったり、補助的な発問をしたり、個に応じた支援をしたりしていくことが大切である。また、少人数指導の授業では、児童の実態に合わせて人数分けをし、指導内容を工夫していくことも必要である。

## 5年 社会

### (1) 教科について

正答率は、都の 73.5%に対して学年 73.7%と、0.2 ポイント上回っている。

観点別の正答率を比較すると、「関心・意欲・態度」「知識・理解」では都の平均を 0.6～2.8 ポイント上回っている。一方で「思考・判断・表現」「技能」は都の平均をわずかに 0.5～0.7 ポイント下回っていることが分かる。この 2 項目は昨年度も下回っていたので、この 2 つの力を中心に伸ばしていくことが必要であると考えられる。

### 〈授業改善についてのポイント〉

地図を活用する技能について、地図の方位、地図記号、縮尺、等高線などの要素を正しく読み取ることができるようにしておく必要がある。そのためには社会科の学習の中で地図の活用場面を意図的に設定するなどして児童が地図の使い方に慣れるように繰り返し指導を行っていく。

### (2) 読み解く力について

正答率は都の 58.1%に対して、学年 62.4%と、4.3 ポイント上回っている

観点別で比較すると「取り出す力」「読み取る力」「解決する力」のいずれも都を 2.9～6.6 ポイント上回る結果となった。「読み取る力」が都より 2.9 ポイント上回っているが、他の項目のポイントに比べ、上回り幅が少ないので、より強化を目指す。

〈授業改善についてのポイント〉

読み取る力を育成するために、2つの資料を比較し、関連付けて読み取る力をつける必要がある。資料の共通点を探したり、具体的にどこが共通しているのか探したりするなどの活動を積極的に取り入れる。また、考えを班やクラスで発表、意見を共有するなどの学習の積み重ねを繰り返し行うことが必要である。

## 5年 理科

### (1) 教科について

正答率は、都 70.8% 学年 72.4%となっており、都の平均と比べて1.6ポイント上回っている。4つの観点のうち、「知識・理解」以外の3観点が都の平均を上回っている。「知識・理解」の問題のみ都平均を3.4ポイント下回っている。課題が見られた問題は、星座早見の適切な使い方を答える問題、ゴムを使った車の実験結果を考察する問題であった。

〈授業改善のポイント〉

授業改善のポイントとしては、星座早見等の観察、実験器具の技能を確実に習得するために、繰り返し操作をさせる指導の充実が挙げられる。児童につまずきが見られた時点で、星座早見の操作方法について再確認し、全ての児童が「できる」、「分かる」ようにする等の学習活動が考えられる。児童に多くの実験を取り組ませ、実感を伴った理解をさせて、知識の定着を図る必要がある。

また、実験結果の考察においては、より妥当な考えを作り出すために、児童が複数の情報を収集してその情報を共有し、それらに関係付けながら分析できることが重要である。そのためには、収集した複数の情報から、どのようなことが言えるのかを話し合うことを通して要点を整理し、それらに関係付けながら多面的に分析できるように指導することが大切である。

### (2) 読み解く力について

正答率は、都 66.7% 学年 65.6%となっており、都の平均と比べて1.1ポイント下回っている。3つの力のうち、「読み取る力」は都の平均を2.5ポイント上回っている。「取り出す力」の問題においては2.8ポイント、「解決する力」の問題においては2.9ポイント下回っている。

〈授業改善のポイント〉

授業改善のポイントとしては、問題解決的な学習を充実させ、観察・実験の結果を、問題や予想に照らし合わせて考察させる指導の充実が挙げられる。理科における問題解決の過程の「観察・実験の結果を基に考察する場面」においては、観察・実験の結果を、表やグラフに整理して分析的に読み取らせるとともに、自分の立てた予想に照らし合わせて考察させたり、他者の考えと共有化を図りながら、自分の考えをより妥当なものとなせたりすることが重要である。そのためには、観察・実験の結果をグラフや表にまとめ、それらを基に考察して、根拠を示しながら自分の考えを説明する学習場面を設定していくことが大切である。